

ブタを訪ねて

コンサルタント Info Box 津田謙二

1996年の晩秋、私はカイロ空港に降り立った。手荷物の中にはコーランが入っていた。

目的は？

愛されるブタ、のレリーフをこの眼で見、確かめるため、である。

中近東、イスラム圏ではブタは徹底的に忌避されている動物である。そのまん中ともいえるエジプトはカイロ近郊、サッカラにある紀元前2250年頃に建てられたカゲムニ神宮葬祭殿に、仔ブタに人間が口移しで餌を与えているレリーフを見つけた、是非見にいっちゃいとの知らせを、筆者と共にブタをライフワークとする仲間、元駐エジプト大使片倉氏より受け取ったのは、その年の7月だった。

このお便りには、古代エジプトではブタが神聖な動物とみなされていた、というかなりの証拠がある、としてこれまで片倉氏が調査した多くの事例が図入りで述べられており、いやが上にも筆者の好奇心を煽られる結果となった。

早速、行く行くと返事をし、どうせ行くならエジプト古代の遺跡を見て回り、あわせてブタを忌避するイスラム教の生まれた風土をより深く味わうためにと、持ち歩きに便利な岩波文庫・井筒俊彦訳によるコーラン、上、中、下三冊を買い求め、読み始めたのである。

もちろん、コーランの中に出てくるブタの記述はすべてチェックする。

実を言うと、ブタと宗教、特にタブーについて

調べるために、その前の年から、旧約、新約聖書の通読にかかっており、この時点で九割方読み終わっていた。と述べる后感心なさる方もおありかもしれないが、要するに聖書の中のブタ、家畜に関する記述だけは見逃すまいと眼をこらして活字を追っていただけ、なのである。

だが、聖書は1400ページ以上もある。1年2ヵ月を要して、怪我の功名ならぬブタの功名でこの大仕事を成し遂げる寸前に片倉氏からのお便りであった。

聖書の成果は？ あったといえるかもしれない。人類の、生きる智慧としての宗教、それにかかわるタブーについてのいくつかの示唆を得られたからである。

あの、人類に対してこの上なく有用なブタが何故忌避されるに至ったか、についてひとつの仮説が形成されかかっていた。聖書の中の言句から見て、ブタの忌避はモーゼ以後のように思い始めていた。モーゼが60万人の人を連れてエジプトを離れて荒野をさすらう、その不毛の荒野は木の実も草も水もなく、大食で水浴びの好きなブタを到底連れて歩ける場所ではなかった。しかし、すでにブタの美味であることを知り、荒野の生活にともすればくじけそうな人々は、何かといえばエジプトの生活を、ブタのおいしかったことを口にし、それがモーゼの指導力にとって負担になることがあったのではないか……。

その証拠に、聖書ではっきりブタを否定しはじ

めたのはモーゼの出現以後だから、というのが、当時の筆者の頭の中で組み立てられた仮説だったのである。

ここで話を十年ほど前にもどして、筆者とブタ、そしてブタ仲間である片倉氏との出逢いについて述べておこう。

この起こりは、北海道はルスツにある山寮で、各分野にわたる人たちが毎年のように集い、数日を共にし、新聞・テレビと縁を切ってゆったりと流れる時間に身を任せ清談・清遊で過ごす文化サロンとも言うべき集いでの会話がきっかけであった。

ちなみにこの集いは、ヒノキ新薬（株）の阿部社長が、その豊かな人脈をもとに、第一線で活躍する政界人や官界の名士、経営者、学者、ジャーナリスト、銀行マン、デザイナー、技術者といった各分野の人が夫人同伴で、肩の力を抜き、立場、肩書き、年齢を離れて、これまた仲間である音楽家たちの演奏を聴き、遊び、語り合うという、世にも楽しく、かつぜいたくな集いなのである。

昼食後のひととき、本当は動物園の園長さんになるのが夢だった、という外務省きってのアラブ通…夫人がこれまた高名なアラブ学者…が、農業関係に詳しい化学技術者がいると知って、筆者にちょっとした問題提起をしたことに始まる。

「動物というか、家畜のブタですけど、あれだけ人類に貢献しているながら、どうも正当に評価されているとは思えないのです。特にイスラム社会では忌避、いや嫌避されている。これはいったいいかなる理由でしょうか。」

化学技術者の筆者、ウーム、と考え込む。

「それに何かといえば汚いものの代名詞のよ

うに言われ、性的にも卑しいもののように見られている。どうしてでしょうか。」

ここで筆者、考え考え返事をする。

「本来ブタは、ウシ等に比べるとはるかに清潔好きの動物です。汚いとみるのは、人間がブタを勝手に不潔な場所に押し込んで飼っている、つまり人間の側の責任ですよ。ウシは排泄物をどこにしても平気、でもブタは広い場所を与えるとちゃんと排泄場所を決め、普段いる場所は清潔にしています。それに性的な面ですが、これはブタの本来の性質というより、家畜化の過程で人間が繁殖力の強いものを選抜して品種改良を繰り返した結果、と私は見ています。現にイノシシはそうじゃないでしょう。」

聞く外交官は我が意を得たり、と大きくなる。二人はさらに続ける。

「このブタの問題、人類との関わり、これは畜産学、動物学、育種学ばかりでなく、人類の歴史、民族学から宗教、食文化にまでからむ大変おもしろいテーマになり得ますね。」

「そうなんです。われわれの日常生活の中にもブタの姿の陶器の蚊遣や貯金箱などでずいぶん親しまれているではありませんか……。」

こうして始まったブタ論議はなんとも楽しく、もう少し勉強しようじゃありませんか、資料を集めましょう、と話は進んでしまった。

とはいえ、お互い仕事を持つ多忙な身、時間はそれなりにかかったが、それぞれの人脈をたどって資料は蓄積されていく。筆者もヤエス産業の椿氏を通じて日本全業の三村二雄先生を知り、多くの資料と共に波岡茂郎先生まで紹介していただくこととなって、もう今更引くに引けなくなってしまったのである。

たまに片倉さんと逢うと、そうそう、宮崎駿のアニメ「紅の豚」見た？ いや、まだ。あの主人公、かっこいいブタなんです、是非見ておなしゃ。うん、すぐ見に行く。といった会話になる。そのうち片倉氏、大使として赴任のイラクで戦争が起こり、日本人人質救出でご苦労なさったり、次の任地のエジプトで今でもブタを飼っていることを調べだしたりで、お互いどうにもブタから離れるわけには行かなくなっていたのである。

さて、話をエジプト、カイロに戻そう。そのとき私の手荷物にはコーランのほかに愛すべきブタ“ベーブ”のビデオも入っていた。この年の夏に公開され、ヒットした牧羊豚の映画である。夜遅くなってホテルのロビーで逢った二人は久しぶりのブタ談義に話がはずむ。

「今日お持ちしたビデオの“ベーブ”ですけどね、この牧羊豚、本当にいるんですよ。今年のはじめ、私が豪州に行って着いたその晩、ホテルでテレビをつけたら放映されているんです。ついでに言いますとね、今年のはじめ東京10チャンネルの“ペット紀行”でもやはり牧羊豚が放映されていることを調べましてね、いや、事実は映画より奇なり、あの健気な働きぶり、感心しましたよ。」

今度は片倉さんが言う。

「いやあ、当方の調べでもいろいろわかってきましたね、カゲムニ以外の宮殿、神殿にも結構いろいろなブタのレリーフがあるんですよ。明日ご案内する古代農業博物館にはブタ（イノシシ）の特別コーナーがありますし、北メソポタミアの遺跡の全動物の骨のうち25%がブタの骨だったりしましてね。それに、別の遺跡から

出た陶片にはブタ肉と穀物の交換レートまで記録されていて、結構高価で取引されているんですよ。それに、古代エジプト王朝の頃のブタの形をした化粧用パレットや装身具も発見されていますね。ただ私の調べでは、ブタがこの地域で次第に忌避され始めたのは、モーゼに先立つ2000年も前の統一エジプトの始まりの頃らしく、以後エジプトのブタ産業の証拠は消え失せているんです…。とはいえ、古代エジプトの神話を調べてみても、ブタに対する嫌悪現象の背景は複雑でひと筋縄では行きそうにありません。」

ここで筆者のブタ忌避はモーゼ以後の現象とする仮説はもろくも崩壊することになるが、それよりも新しい事実のほうがおもしろく、好奇心はますますそそられる一方である。

ともあれ、大使館のボディガードの見守る中での話は楽しく、時間のたつのが早かった。次の日、古代農業博物館にご一緒する。家畜のミイラ等を展示している一角にブタの特別コーナーがあり、ディル・エル・メディーナで発掘されたブタの頭蓋骨が飾ってある。この古代ブタの顔面角は45度近く現代の欧米のブタとはかなり違っている。ここにはさらにブタの雄と雌が交わっている小さな石像もあって、近代のこの国の人々のブタ観を垣間みる思いであった。

さらに大使館公邸で食事をしながら話ははずむ。話題はブタから離れるが、動物好きの片倉大使、公邸の庭に七面鳥、ウズラ、ホロホロ鳥を飼い、よくなついで大使の後をついて歩くのがなんともほほえましく、動物園長さんを思わせる。別にニワトリも飼っていて、エジプトの地鶏と欧米



写真1 エジプト古代農業博物館
ブタの頭蓋骨とレリーフ



写真2 エジプト古代農業博物館にて
ブタが交わっている土像



写真3 サッカラ カゲムニ神宮 葬祭殿
口移で餌を与えているとしか見えない



写真4 エジプト
フィラエ島のイシス神殿の石柱にあるブタ

の最新品種とかけ合わせてどんなヒナが生まれるか楽しみだ、とおっしゃる。

筆者が、そういえば片倉さん、蒙古のラクダはコブがふたつ、エジプトのはひとつ、で、その中間種を探し求めているとおっしゃっていましたが、と問うと、それぞれ、それなんです、遂に発見しましてね、カスピ海のほとりの…と詳しく地名を挙げたうえで、そこに前のコブが小さいひとコブ半のラクダ、いるんです！ もちろん見に行きました。あなたも是非見に行ったらいいです…。

ううむ、そこまではねえ、でもこの人、多忙な外交の仕事の合間によくぞ、いや、こうした心の余裕を持てる、そのことが凄い、と思った。

ところで、本命のカゲムニ神殿のレリーフ、仔ブタの部分小さくて、片倉さんは見つけるのにご苦労なさったようだが、それはどう見てもブタだった。それにしても今の現地の人は全く興味を示さぬというより、あえて無視している感じなのである。

ともあれ筆者はうれしかった。古代エジプトではブタは愛されていたのだ。



写真5 エドフ ホロス神殿
どう見てもブタです

このエジプトの遺跡めぐりの間、筆者は案内人の説明は上の空で、石像やレリーフの中のブタの姿を探し求めて歩いた。カバとおぼしきものもあった。ブタを訪ねて何千里、壁画を見る眼つきが普段と違って、とも言われた。

片倉氏はエジプト勤務を終える前に、カイロのすぐ近く、カリュュービア県に日量9,400トンといわれる都市ゴミの集積地があり、そこでブタを飼っているとの情報を確認するために訪れて、その報告を送ってくださった。

ここに住むサバリーンと呼ばれるゴミ収集人のほとんどは、先祖代々このなりわいを引き継ぐコプト系キリスト教徒で、片倉氏の訪ねたのはコプト系尼僧院の経営する社会福祉センターである。



写真6 カイロ近郊カリュュービア県の都市ゴミ
(9,400トン/日)
集積地の一面にて俯瞰 (片倉氏調査)

猛烈な臭気の立ちこめる生ゴミ処理施設の一角でブタがトタン板に囲われて飼われていたのだ。

イスラムの国、イスラム教徒の見えぬ所で飼いつづけられたブタは、他の種の血が混じる機会もなかった故か、体毛の色はもとより顔面角すなわち鼻の突き出し方も長く、近寄れはしなかったが、エジプトで古代に飼われていたブタの特長を維持しているようだったと述べている。こうしたトタン板の囲いの数からここで飼われているブタは百数十頭にのぼると思われ、さらに別のゴミ集積地、オールド・カイロの一角およびナイル河の西岸、モカッタム丘陵の谷底部分でもブタが飼われているらしい、と見ておられる。生ゴミの有効利用のためにもブタを飼養することがエジプトの役に立つはず、そのような形で援助ができぬものか、との期待も述べられてあった。これが片倉さんのエジプトでの最後の(?)仕事だった。